

아저씨의 혼장박완서波田野試訳2017年1月14日（土）

p. 81

P洞は、僕の記憶にある品のある街とは似ても似つかなかった。昔式の瓦葺きの大きな家はすっかりさびれて土の中に半分沈みこんでいるみたいだったし、毎朝、箒の掃きあとがきれいに残っていた小路には、汚れてでこぼこの敷石が不規則に敷かれていた。どの家も軒の下まで部屋を増築しているのだから外観は醜悪で、そうでなくても狭い道をますます狭くしていた。足もとに注意しながらむさくるしい道を^{ヨインスク}旅人宿のある三叉路まで来るあいだに、僕はこんな洞の住人はみんなつまらん人間にきまっていると見下げる気分になっていた。

旅人宿がある三叉路を左にまがって右の三番目にある家も、やはり柱が危なげに傾き、門の敷居が道路より低くなった、まるで沈没しかかった船みたいな古い家だった。表札も番地表示もない。僕は向かい側の家の門まで下がり、垂れ下がった屋根の棟や瓦の溝に生えたペンペン草を観察し、つぎに門の隙間から中の様子をうかがった。いまにも倒れそうな家だが部屋は広そうで、いくつも置いてあるゴミ箱がどれもあふれそうなを見ると、沢山の家族が住んでいるようであった。

僕は大きく咳払いをしながら、門扉を押した。門の脇の部屋の練炭の焚口の前にしゃがみこんで洗濯物を棒でかきまわしながら煮沸していた女が、ちらりところらを見た。あけっぱなしの中門から、大きな中庭といくつもの家族が間借りしている部屋が見えたが、僕は、ノウネおじさんが寝ているのはこの部屋に違いないと考えた。ソンプョ兄さんに聞いた大便の話をすぐに思いださせるような悪臭がただよっていたからだ。

p. 91

まもなく、おじさんの手に力が籠もり、口の動きがしっかりしてきた。薄ぼんやりした目に弱々しい喜びの色が浮び、その口がこう言うのを僕ははっきりと聞いた。

「ウンピョ。ああ、ウンピョや」

おじさんは、そう言っていた。おじさんが自分の息子をふりきり、代わりに甥を連れて避難してきたあと、僕は、彼が息子の名前を口にするのを一度も聞いたことがなかった。ウンピョの親友だった僕を見たら、自分の息子だって死なずにおれば、どこかの空の下でこんなふうにならなくなっているだろうと、悲しげな様子を見せてもよさそうなものなのに、そんなことは一度もなかった。息子をふりきると同時に、彼は息子の名前まで忘れ、それ

どころか記憶からも消して生きていたようだった。息子の代わりに本家の甥を連れて避難したと自慢するときの「息子」は普通名詞であって、ウンピョという固有名詞の息子ではなかった。

彼が初めて口にしたウンピョという声は、やっと聞き取れるくらいの微かな声だった。しかし僕の耳には、悲痛な叫び声のように聞こえた。彼は死力をつくして悲痛な叫び声を上げていた。ああ、三十年前にウンピョの母親が上げた悲痛な叫び声は、いまようやく復讐を遂げたのだ。

こうなることを長いこと期待していたというのに、僕は快感ではなく空しさのために身を震わせた。

キーフォルダー売りが並んでいる通りにまた出てきたときは、陽が沈みかけていた。陽が沈むころになるといつも胸いっぱい様々な錠前をぶら下げ、米の入った紙袋と塩サバを手に肩をふって歩いてきたノウネおじさんの姿が目には浮かんだ。紙袋と塩サバのためか、錠前が勲章のように見える突飛な錯覚は起きなかった。彼は、寂しげでみすぼらしい錠前売りでしかなかった。

僕が彼の姿をありのまま見られるようになるのに、なんと三十二年もかかったのだ。